

## エピローグ：コンゴ川のほとりで

ブラザヴィルで好きな場所がある。「Rapide」（フランス語で「早い」という名前のカフェバーで、簡単な食事も取れる。ただし、そのサービスは店名に反してとてつもなく遅い。コンゴでは定番の焼いた鳥を頼んだら、2時間近く待たされた。料理が来たときにはビールが数本空いていた。カフェバーの眼下にコンゴ川が流れている。川が浅瀬になって大きな岩が点在するので、急流になっている。店の名前もそこから来たようだ。川は四六時中ゴーツという轟音を辺り一帯に響かせ、雨季になると水量が多くなり激しさを増す。水量が減る乾季は川床が見え、岩間に残った水たまりには小魚がいて、それをつかむ子どもたちがいる。街の中心部にも同じく川に面した洒落たサービスの良いカフェバーがあるが、私は決してきれいとは言えないこのRapideの方が落ち着く。

ワニのラベルが貼られたコンゴのビール（Ngok）を飲みながら、川遊びに興じる子どもたちやせせと河岸で洗濯する女性たち、少し離れた浅瀬で車を丸ごと洗っている人たちを見るのが楽しい。何か「アフリカ」というものが感じられるからだ。その「アフリカ」とは一体何だろう？ おそらく人の生き様であり生活の営みではないか。この急流ではこれまで多くの溺死事故が起きている。なかには子どももいる。それでも激流に飛び込む子どもたちは嬉々として、周囲の大人も心配する様子はない。川で洗濯する人たちも、日本ではもはや昔話にしか出てこないが、ここでは普通の生活に溶け込んでいる。車を川で洗うに至っては、もはや想像もつかないことだろう。

こうした彼らの日常生活にいつも何かたくましさを感じてしまう。「生きる力」というものかもしれない。

小論で見てきたように歴史のなかで、人類史上最大の強制移動とも言われる奴隷時代は約4百年続いた。1千万人以上にも及ぶ人の強制移動を、当時は誰も非人間的な行為であるとは考えなかった。その後のヨーロッパによる植民地化では、「無主の地」と見なされたアフリカに列強国の都合で線を引き、国境を作り、人々を分断していった。そして現地の人々は労働力として資源開発に駆り出され、ヨーロッパ域内の戦争では戦闘員として動員された。第2次世界大戦後、宗主国はアフリカの独立を認めていくが、十分な準備や独立後の社会を担う指導者層の育成もないなかでの独立は、多くの混乱を招くことになった。さらに、東西冷戦でアフリカにさらなる分断が生まれ、西側の砦を守るためヨーロッパは独裁政治を支持した。冷戦の終了後にはその独裁制を非難し民主化を要求、ことを急いだ多くの国では内戦が起こった。軍事クーデターが相次いでいる昨今の西アフリカも、「アラブの春」と当時は称えられたチュニジアやリビアの独裁政治の崩壊と関わっていると指摘されている。

アフリカは歴史を通して常にヨーロッパに影響を受けてきた。振り回されたと言っても過言ではない。この小論はその一例としてコンゴ共和国を中心に見てきただけで、アフリカとヨーロッパの関係の歴史のなかのほんの一部にしか過ぎない。しかし、多くの国で似たような歴史を辿っている。現在も残念

ながら大陸のあちこちで内戦が続き、女性や子どもたちが暴力の犠牲となっている。地中海では命を賭けてゴムボートに乗り、ヨーロッパを目指す難民が後を絶たない。

アフリカの歴史の全体像から見れば、負の部分が非常に多い。現在のコンゴでも強制労働や弾圧、内戦、さまざまな暴力を経験し、また実際にそれを体験した人が今も生きている。しかしその一方で、人々は時として信じられないくらいに明るい。楽天的である。確かな根拠がないのに自信に溢れている姿は、時々うらやましいとさえ思う。

昨年10月、コロナ禍にもかかわらずコンゴに行く機会があった。感染予防措置としてマスクの着用や入国者の予防接種の義務などの制限がかけられていた。空港ではPCRの陰性証明の提示が求められ、検疫ではいつも以上に厳しいチェックを受けた。荷物を受け取って空港内の待合のロビーに入っても、普段なら出迎えの人でごった返すのだが、そこには誰もいなかった。コロナの影響は大きいと感じた。ところが、その印象は空港建物を出た瞬間に吹っ飛んだ。

出迎えの人たちは建物の外で待っていたのだ。そしてそこではいつものあの喧噪が広がっていた。再会を喜ぶ人たち、客引きをするタクシー運転手、限られた駐車スペースを巡って大声で場所を取り合う人たち。車で街を走って見る光景も、以前とほとんど変わらない。大きな市場近くでは屋台がモクモクと煙りをあげて肉を焼き、その横で人々はビールを飲んで談笑している。初めて見た人は何かのイベントだと思うだろう。そして誰もマスクを付けていない。まるで何事もなかったかのような光景が広がっていた。

考えてみれば当然のことかもしれない。コンゴの人たちは、多くのアフリカ同様、そもそも日常的にマラリアの危険性と隣合わせの生活をしている。さらにエボラ出血熱やデング熱などといった熱帯の感染症も存在する。菌類も含めた地上の生物種の多くが熱帯地域に分布しており、アフリカでの生活はそもそも病原体と接触する機会が多い地域である。したがってコロナはその一つの延長に過ぎないのかもしれない。

「コロナが怖いのか？」マスクをしていた私をからかうかのように言ってくる人がいた。多くの人がまだワクチンを打っていなかった。80年代、HIV/AIDSがアフリカで蔓延していると話題になったとき、「風邪みたいなもの」と言っていた知人のコンゴ人を思い出した。危険と常に隣り合わせにいる生活のなかで、少々のことでは動じることはないのかもしれない。長年の苦難の歴史が、彼らをそうさせるのだろうか。

おそらく今も、Rapide 付近のコンゴ川では洗濯をする女性たちの横で、少年たちが果敢に激流に飛び込んでいることだろう。その奥ではトラックを川で丸洗いしていることだろう。Rapideのサービスも相変わらずに違いない。「相変わらず」と思える光景がたしかに多い。でもそこにこそコンゴでの平和な日常があるのではないと思う。また Rapide で Ngok を飲みたくなってきた。(完)